

とみ た じゅう すけ  
富田重助



富田重助 (1872 ~ 1933)

出典：『名古屋鉄道百年史』1994

明治後半から大正初期にかけて、明治銀行等を創立し、名古屋倉庫(のち東陽倉庫)に経営参加した。

### ■市内線の開通と名古屋市への譲渡

名古屋鉄道の起源は、今から約120年前の愛知馬車鉄道まで遡ることができる。1894(明治27)年創立で1896(明治29)年社名を名古屋電気鉄道と改称し、1898(明治31)年に名古屋・笹島一県庁間2.2<sup>キロ</sup>4区間が開通して営業を始めた。この路線は日本における市内線の第2号である(ちなみに第1号は京都市電)。

富田が名古屋電鉄の経営に参加したとき、営業路線は2.2<sup>キロ</sup>であったものが、23年後(1922(大正11)年)に名古屋市へ市内線を譲渡する直前には96.6<sup>キロ</sup>。(一部郡部線を含む)。この間に名古屋電鉄は、次のような問題に対応しながら市内線の譲渡を図った。

- ① 電車市営論1906(明治39)年に起きている。運賃問題、業績の好調などによる。
- ② 市内線焼き打ち事件1914(大正3)年、第一次世界大戦等を背景とし、運賃値下げ等も関係した。
- ③ 那古野車庫の火災1920(大正9)年車庫内5000<sup>㎡</sup>、車両99両等焼失した。
- ④ 市内線の名古屋市への譲渡1922(大正11)年8月1日、市内線は営業<sup>キロ</sup>数の45%、収入の70%であった。

社員1218人が名古屋市電気局へ移った。

### ■名古屋鉄道株式会社の発足



No.13. Monument in Memory (China-Japan ware) at Nagoya. 碑念祀清征(景百屋古名)

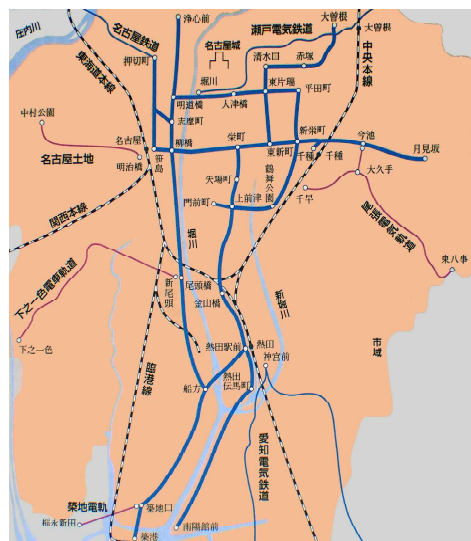
征清祈念碑前の名古屋電鉄 (絵はがき：藤井建氏蔵)

## 地域の発展をリードした鉄道人

### —名古屋鉄道の創設者—

#### ■東海地方の発展のインフラとなった鉄道敷設にまい進

富田重助(幼名吉太郎)は、1872(明治5)年3月15日に、父富田重政母ふさの長子として誕生した。父は名古屋で小間物、練油類を商う「紅葉屋」の家業をつぎ、洋反物、唐糸のほか、幕末・明治初期の貿易にも進出し、商才を発揮した。父重政が1876(明治9)年に死去した。吉太郎、富田家を相続し、重助を襲名した。5歳の重助は、叔父の神野金之助が後見人となり、紅葉屋のノレンを総番頭浅野甚七らに譲り、土地・金融方面に進出した。重助は名古屋商業学校に学び、日本最初の私立銀行である三井銀行東京本店に2年間勤めて、名古屋に帰り叔父神野金之助とともに、農地山林経営、神野新田の開発などに携わった。1900(明治33)年に名古屋電気鉄道(株)の監査役に就き33年間在職し、名古屋鉄道が名古屋市内線(名古屋市電の前身)から発して、郡部線中心に発展する時期に手腕をふるい、名古屋鉄道



鉄道路線図

(名古屋へ譲渡した市内線の路線図)

出典：『名古屋鉄道百年史』1994

1921(大正10)年、名古屋電気鉄道を解散し、名古屋鉄道(株)創立、社長富田重助、常務上遠野富之助、取締役岡本清三他6名。営業路線の<sup>キロ</sup>数は複線33.7<sup>キロ</sup>、単線21.2<sup>キロ</sup>、車両は、四輪電動客車37両、ボギー電動客車7両、四輪電動貨車13両、貨車57両、計114両とまことにさびしいものであった。54.9<sup>キロ</sup>の営業路線でどのように収益をあげていくか、名古屋鉄道のこれからの発展は、郡部線の充実と延長しかない。富田重助社長の構想は、線路の改良、新線の建設、他の私鉄の合併吸収の三点に絞られた。

(井土清司)